

## 定年退職後の第三の居場所と社会関係 — 居心地の良い場の形成 —

アメリカの社会学者 Ray Oldenburg<sup>1)</sup> は、「家庭」「職場や学校」という生活上必要不可欠な二つの居場所に続く「第三の居場所 (Third place)」の存在が都市の魅力を支えることを指摘しています。都市に暮らす人々にとって、散歩途中で挨拶をしたり、知り合いとたまたま一緒になって世間話をしたり、居心地の良さを感じる場が重要であるとした主張は、アメリカの大手コーヒーチェーンの創業理念にも大きな影響を与えました。この居場所のあり方については、心理学、都市社会学、建築学など、多様な分野で論じられています。しかし、それまでの人生で大きな部分を占めてきた「職場」という第二の居場所を無くした定年退職者にフォーカスした研究はあまり行われていません。本稿では、2010年11月に開催した財団主催シンポジウム「定年退職後、第三の居場所とは」の内容を交えつつ、居場所に関する研究の概観を行ったうえで、定年退職後の第三の居場所について考察を行います。

### 定年退職後の第三の居場所

著者の関わる地域デビュー講座などで出会う定年退職された方々との会話のなかで、「住んでいる地域に居場所がない」というコメントを耳にします。その方々に共通するのは、現役時代には、会社と家の往復、土日は疲れて家にいるか接待ゴルフという1週間の繰り返しで、近所のお店や公園、住んでい

る人についてはほとんど知らないことです。さらに、退職後に習慣化した朝晩の散歩によって近所の地理には詳しくなったものの、近所に顔見知りすらいなことがあげられます。

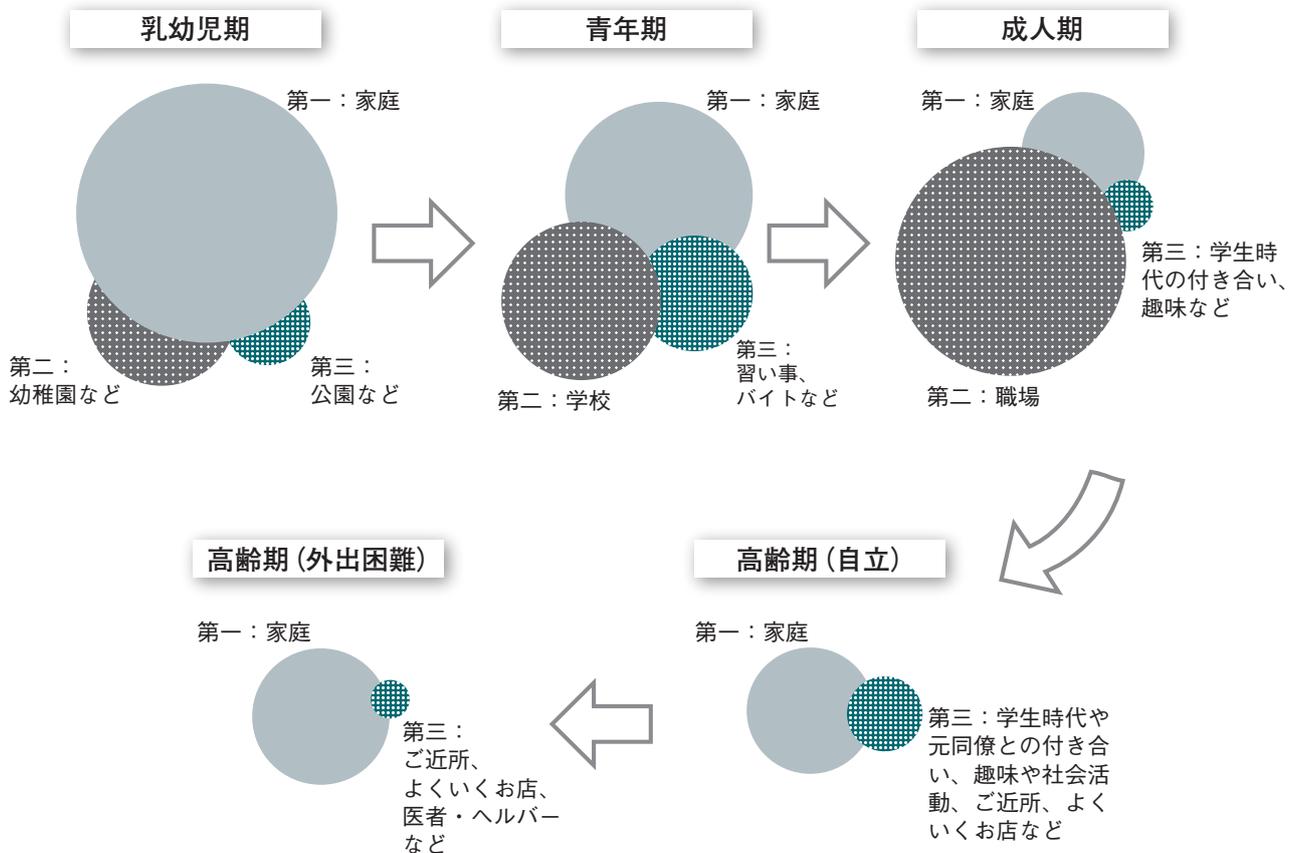
退職前から住み続けてきた地域に以前はなかった居心地の悪さを感じるのはなぜなのでしょう。これは、現役時代には、生きるうえでの大切な場として「職場」という第二の居場所が存在していたことによるといえます。特に職住分離が進んだ都市部で暮らす定時制市民ともいわれてきた中高年男性については、「職場」でも「家庭」でもない「寝だけの場所」には何も求めていないことが考えられます。何も求めていないからこそ、居心地の良さも悪さも感じない…。これは「家庭」との関係性についてもいえる可能性があります。

このライフコースごとの居場所の移り変わりを概念的に示したのが図1になります。高齢期は、成人期に大きな部分を占めていた第二の円を失うのと同時に、第三、第一の円の小ささを再確認する時期といえるのではないのでしょうか。第三の円をいかに大きくしていくかは、セカンドライフを充実させていくための大きな課題といえます。

### 居場所に関する研究動向

居場所という言葉は、明確な定義づけが行われないうまま、様々な分野で用いられてきました。石本<sup>2)</sup>

図1 定時制市民と「居場所」



は、心理学関連分野における居場所に関する研究を整理し、居場所が必ずしも物理的空間を伴わない形で捉えられるようになってきており、近年では他者とのつながりを重要な構成要素としていることを指摘しています。さらに、最近では、「安らげる」や「ありのままにいられる」「役に立っていると思える」といった感情を伴う場所、時間、社会関係を指して用いられているとしています。それらの研究においては、青年期を対象に居場所の重要性が論じられることが多く、高齢期を対象にした研究は多いとはいえません。

インターネット上で無料公開されている社会老年学文献データベース DiaL (<http://dia.or.jp/dial/>) を用いて、1975年から2010年までに発表された日本の高齢者の居場所に関する論文を検索しました。タイトル、和文抄録、キーワードに、「居場所」を含む論文を検索した結果、22件が選別されました。選

別された論文では、認知症高齢者の行動の背景にある心理的理由の分析、施設入所者にとっての居場所としての施設の意味といった研究が中心で、自立高齢者を対象とした研究は3件でした。この内、他者とのつながりに着目した研究は1件<sup>3)</sup>のみで、家庭内での役割を終えた前期高齢女性が家族以外の身近な同性・同年代の他者との交流を通じ、「一緒にいると気持ちが和む」「顔を見るとほっとする」といった情緒的な居場所を得ていることを明らかにしています。

建築学分野でも、建築計画や公共施設計画の観点から、居場所を「自由な時間を過ごす場所」や「居心地の良い場所」と捉え、このあり方が検討されています。尾崎ら<sup>4)</sup>は、都市高齢者の「居心地の良い場所」を構成する大きな要素として、挨拶を交わす他者、趣味を共に行う他者、幼馴染といった多様な社会関係の存在を挙げています<sup>4)</sup>。

## 社会活動と第三の居場所

次に、幸福な老いや高齢期の生きがいなどと結び付けて語られる社会活動を、第三の居場所の一つと捉えてみたいと思います。

社会活動（家庭外での対人活動）は、個人活動（旅行、スポーツなど10項目）、社会参加・奉仕活動（町内会活動、ボランティア活動など6項目）、学習活動（老人大学など4項目）、仕事（1項目）の4つの領域で構成されているとされています<sup>5)</sup>。これまで、社会活動への参加を規定する要因を明らかにすべく多くの研究が行われています。個人活動、社会参加・奉仕活動への参加については、親しい友人・隣人の数との関連が指摘されています。

しかし、社会活動を高齢者の主要な交流の場と位置づけ、交流の実態やその効用について検討した研究はほとんど見られません。菅原ら<sup>6)</sup>は、活動への関与度とメンバーとの親しさに強い関連を認めています。さらに、男性については、仕事関係や同窓会を介した活動を比較的に多く行っていることを反映してか、組織構造がしっかりとした集団、明確な役割を担う場合のほうが活動に関与しやすく、親しい社会関係も生まれやすいことを挙げています。

## まとめと今後の展開

既存研究から、定年退職後の第三の居場所を考えるうえで、一緒にいて安らぐ、ほっとする、趣味を共に行うといった他者の存在が大きな意味を持つことがわかりました。

高齢期の社会関係には性差があり、男性の情緒的に親密な他者は、職場や学校といった第二の居場所

を介して知り合った関係であることが知られています。それらの他者と関われる会社のOB会や学校の同窓会といった集団は、第三の居場所となりやすい要件を備えた場といえます。

しかし、実際のOB会や同窓会で、友人と呼ぶような親密な他者は、ごく一部といえます。筆者が参与観察を行う同系列企業OBの集団でも、会を居場所と表現しつつも、親しく付き合うメンバーのいない（つくらない）人が多く存在します。

今後は、同系列企業OB会、行政が行う各種講座、そこを起点とした自主グループ（例 表紙で紹介した於篤の会）など、様々な社会活動での調査を継続し、居心地の良い場の形成につながる他者の様態を明らかにし、退職後の居場所づくりにむけた知見を積み重ねていきたいと思います。

（澤岡 詩野）

\*財団主催シンポジウム『定年退職後、第三の居場所とは』についてはダイヤ財団新書31として刊行されています。ご希望の方は、ダイヤ財団までご連絡ください。

### 【参考文献】

- 1) Oldenburg R : The Great Good Place. Da Capo Press, Cambridge, MA (1989).
- 2) 石本雄真：居場所概念の普及およびその研究と課題. 神戸大学大学院人間発達環境学研究紀要, 3 (1) :93-100 (2009).
- 3) 大森純子：前期高齢女性の家族以外の身近な他者との交流関係に関する質的記述的研究；関係性の特徴『気遣い合い的日常交流』. 老年社会科学, 27 (3) :303-313 (2005).
- 4) 尾崎有輝, 山崎寿一：地域における高齢者の生活行動と居場所の特性；神戸市灘区六甲道地区を対象として. 日本建築学会近畿支部研究報告集, 353-356 (2009).
- 5) 岡本秀明, 岡田進一, 白澤政和：大都市居住高齢者の社会活動に関連する要因；身体, 心理, 社会・環境的要因から. 日本公衆衛生雑誌, 53 (7) :504-515 (2006).
- 6) 菅原育子, 片桐恵子：中高年者の社会参加活動における人間関係；親しさとその関連要因の検討. 老年社会科学, 29 (3) :355-365 (2007).